

なつかしや

故郷から

雲よせ来る!

此の歌は片歌と申します。

此の時、命の御病氣は急に重くなりました。

こうして、ついに、

あゝ、少女の

少女の家に

おいてきた

劔よ! 太刀よ!

おゝ! その太刀よ!

と歌ひつゝ、お崩くなりなさいました。

おつきの人々は、急いで、都へお使者をおたてになりました。

倭の國にいらつしやつたお后や御子たちは、つれだつて此の能煩野へお下りになり、御陵をこしらへ、あたりの田畑を匍匐ひ廻りながら、聲をあげて泣き悲しみなさいました。

御陵近くの

田の稻の莖に

稻の莖に

からみついてゐる

野老づらよ

命の御靈は大きな白い鳥となつて、青空を翔りつゝ、濱邊をさして飛び去りました。お后や御子たちは、小竹の荻株に御足がきり破れても、その痛さをも忘れ、泣く泣く追ひかけて行きました。

その時のおうた。

まばらな小竹の笹原は

腰までうもれる

とは云へ
虚空へはとんでもゆけず
足であるいて行くことか

それから、海の潮の中へはいり、追ひかけてゆきなさいました。
その時の歌。

海をあるけば

腰のもどかしさ！

大きな河原の

浮藻のやうに

海をあるけば

ゆたゆたとたゆたふ——

白い鳥は飛んで磯の岩の上に翼をやすめやすめして行きました。

濱の千鳥

砂濱はとんで行かないで

荒磯づたひに……

以上の四つの歌は、御葬儀の時に歌ひました。それから、天皇の御大葬の時には、必ずこれを歌ひました。

白い鳥は、また、その國から飛んで出て、青空を翔りながら、河内の國の志幾まで行つて留りました。で、そこにも御陵を作つてお鎮めなさいました。それから、御陵を白鳥の御陵と申しました。

併し、白い鳥は、其地から更にまた空を翔つて飛び去り、遂に姿が見えなくなつてしまひました。

命には多くの御子がゐらつしやいました。その中で、帶中津日子の命がお位をお承けになりました。

成務天皇

若帶日子の天皇は、近江の國の志賀の高穴穗の宮にましまして、天下をお治めなさいまし

た。
天皇は、建内宿禰を大臣として、大きな國、小さな國の國の造を定め、また、國々の國境
や、大縣、小縣の縣主をお定めになりました。
天皇は、九十五歳でお崩れになりました。お陵は沙紀の多他那美にあります。

九角鹿の蟹

仲哀天皇

帶中日子の天皇は、長門の國の豊浦の宮や、筑紫の國の訶志比の宮に坐しまして、天下をお治めなさいました。

皇后は、息長帶姫と申し、皇子に品陀和氣の命とおつしやる方がゐらつしやいました。此の皇子は、お生れなすつた時に、お腕に鞞の形をした筋肉がついてゐたので、大鞞和氣の命とも申しました。これによれば、皇子は、まだ、御胎内にゐらつしやつた頃から、國をお治めになつてゐたことがわかりませう。

暫く以前のことです。皇后が神憑りなさいましたことがありました。

それは、天皇が筑紫の國の訶志比の宮にゐらつしやいました時のこと、熊曾の國を平げやうといふので、天皇自らお琴をおひき遊ばし、建内宿禰は庭に侍つて、神のおつげをお待ちうけておいでなさいました。すると、お后は、神憑りなすつて、

「ずつと西の方に國がある。その國には、黄金や白銀や、目もさめるばかりのさまざまの寶物が澤山にある筈だから、私はその國が治めて見たい。」

とおつしやいました。天皇は、

「いや、いくら高い丘に登つて見ても、西の方には何も見えない。たゞひろびろとした海があるだけだ。」

とおつしやつて、それは詐の神様だらうと思召し、お琴を押し退けたまゝ、おひきになりませんでした。さうして、ちつと黙つてゐらつしやいました。

神さまは、大さうお怒りなすつて、

「おほかた此の國は汝の治める國ではあるまい。汝は黄泉の國へ向はれよ。」

と申されました。

建内宿禰は

「恐れ多いことで御座います。陛下、どうぞ御琴をおひき下さいますやうに。」

と申しました。

天皇はお琴をとりよせて、しぶしぶとおひきなさいましたが、何程もたゞない中に、お琴

の音がとぎれ、ふつつりと聞えなくなつてしまひました。

どうしたことかと、宿禰たちが、燈火を點けてうかがひますと、天皇は、お琴を抱いたまゝはやくとされてゐらつしやいました。

多くの人々は驚ろきおそれて、假の喪屋に收め奉り、更に大幣をとり、獸の皮を生きながら剝いだ罪や、逃げやうとする獸をひとつらへて、その皮をひき剝いだ罪や、哇をこはしたり溝を埋めたりした罪や……いろいろな罪といふ罪をことごとく集めて、大祓をしました。

建内宿禰は沙庭に侍つて神のお言葉をおまらうけしました。すると、神は、

「此の國は、やがてお生れなざる御子が、お治めなざるであらう。」

とおつしやいました。

建内宿禰は、

「恐れ多い事で御座います。それでは、その御腹にゐらつしやいますお方は男か女かどちらの御方でせう。」

と申しました。神は、

「男の子だ。」

とおつしやいました。

「さうおつげ下さいます神様は、どなたでわらつしやいますか。」
と申しますと、

「天照大神のお心である。また、底筒の男、中筒の男、上筒の男、三柱の大神である。いま、ほんたうに國を求めやうと思ふならば、天つ神や、地つ神や、山の神や、海河の神や、すべての神々に悉く幣帛をさげ奉り、私の魂を船の上に祀り、檜の灰を瓢に入れ、箸とそれから柏の葉でこしらへた器とをたくさんに海に浮べて、さうしておわたりなさるがよろしい。」
とおつしやいました。

皇后は神のおさとしの如く、大軍を整へ軍船をおしならべてお渡りなさいました。すると、海の魚たちは、大きな魚も小さな魚も、悉くお船をせ負つて渡つて行きました。而かも追風がそよそよと吹いて、お船は浪のまにまに進むことが出来ました。
すると、そのお船におされた波は、凄しく新羅の國へ押しあがつて行つて、國の半程まで



浪の船御

も進みました。

その國の王様は、大さうおそれかしこまつて、

「これより後は、天皇のおほせのまゝに、御馬飼となつてお仕へしませう。毎年毎年、大船を並べて船の腹を乾かすことなく、拖載を乾かすこともなく、天地のあらんかぎり末長くお仕へいたしませう。」

と申しました。

皇后は、そこで新羅の國を御馬飼部とし、百濟の國を、渡の屯家とし、新羅の國王の門前には御杖をつきたて、住吉の大神の荒御魂を、國のお守りの神として鎮め祭り、さうしてお還りなさいました。

彼の國をまだ征伐してしまはないうちに、御子が産れさうになりました。皇后は、お懐みになる爲めに、石をとつてお腰に結び、筑紫の國まではるばるお還りになり、さうして、御子をお生みになりました。その御子をお生みになつたところは宇美といふ土地です。また、そのお腰の石は筑紫の國の伊斗の村にあります。

皇后はまた筑紫の未羅縣の玉島の里へおでましなすつて、小河の邊でお辨當をおたべにな



りました。折しも四月の上旬でしたから、河を年魚が群れ泳いでゐました。皇后は河の中へつき出た磯にたち、裳の糸を抜きとつては飯粒をしばりつけて、その年魚をおつりになりました。それから、四月の上旬頃になると、女たちは裳の糸を抜いて飯粒を餌として、毎年、年魚を釣りました。

皇后はいよいよ大和の國へお還りになることになりましたが、何となく人々の心が疑はしくもあつたので、喪船を一つこしらへて、御子をその喪船にお乗せなさいました。さうして、ひそかに、

「御子は生れるとちきに亡くなつてしまひました。」

と言ひふらしなさいました。

かくして、お上りなさいますと、異母の御子、香坂の王と忍熊の王とが、これを聞いて、待ちうけてゐました。二人は、斗賀野に出て、勝つか勝たないか、獲物によつて占ふ爲めに狩をしました。

香坂の王が、歴木の梢に登つてごらんになると、大きな怒猪が飛んで来て、歴木の根を

むくむくと掘つてしまひました。其の大木がどつと倒れ、その枝の下じきになつてふり落された香坂の王を、猪は直に喰ひ殺してしまひましたが、弟の忍熊の王は、こんな恐ろしい兄様の最後をも惶れないで、大軍を起して叛きました。さうして、喪船をめぐり、これは空船にちがひないと思つて攻めやうとしました。

すると、皇后は、その喪船から兵士を上陸させて花々しく戦はせなさいました。

忍熊の王の將軍は難波の吉師部の祖、伊佐比の宿禰でありました。太子のお味方は丸邇の臣の祖、難波根子建振熊の命でありました。

皇后の軍はだんだん攻め進んで、山代の國まで参りました。すると、忍熊の王の軍は、急にふりかへつて、はげしく戦ひつゞけました。

こゝに、建振熊の命は、いつはつて、

「皇后はもはやおなくなりなさいましたから、此の上戦ふ心はもつてゐません。」

とつげさせ、弓絃を絶ちきつて降参いたされました。

伊佐比の宿禰は、これをまことと信じて、弓の絃をはづし、兵士を引きあげました。が、建振熊の命は心から降参したのではありませんから、髪の中にあらかじめ具へておいた絃を

とりだして、更に弓を張り、どんどん追ひ撃ちをはじめました。

忍熊の王は、逢坂山まで逃げのいて、またお手向ひをしましたので、滋賀の沙々那美まで追ひつめ、つひにその軍を滅ぼしてしまひました。

忍熊の王は逃げ路を失つて、伊佐比の宿禰と一緒に、船を琵琶湖に浮べて、悲しげに歌をおうたひなさいました。

いざわが友よ

振熊と戦ふて

痛手を負ふよりは

鳩鳥の

淡海の湖水に

水を潜らうよ

さうして、たうたう海に身を投げて、ともにおなくなりなさいました。

建内宿禰は、太子のお伴をして、禊の式を行ふために、近江の國や若狭の國を經巡り、越

前の角鹿に假の宮殿をこしらへて、そこにゐらつしやいました。

すると、此の土地に住み給へる伊奢沙和氣の大神が、夢に現はれて、

「私の名前を御子のお名前に易へたいと存じます。」

とおつしやいました。

「それは恐れ多い事で御座います。仰せの通りお易へたしませう。」

と申されました。

神は、また、

「では、明日の朝、濱までおでまし下さいませ。お名前を易へるお印の品をさしあげませ

う。」

とおつしやいました。

次の朝、早く濱へ出てごらんになりますと、鼻に傷のついた入鹿が、濱一帯にうちあげら

れてゐました。

御子は神さまに申されました。

「あゝ私に魚を下さいましたか。」

そこで神さまのお名を御食津大神と申しました。
そのおびたゞしい入鹿の鼻から流れ出てゐる血がなまぐさかつたので、そこを血浦といひ
ましたが、後には都奴賀と申しました。

大和へお還りなさいました時、御祖の息長帯姫の命は、待酒といつて、旅より歸つて來た
人にすゝめる酒をそなへ、それをおあげなさいました。さうして、斯ういふお歌をおうたひ
なさいました。

此の御酒は

私のこしらへた御酒ではない。

酒のかみ

常世の國にいつまでもゐらつしやる

少名御神が

神ほぎに 祝ひくりかへしつゝ、

豊ほぎに 祝ひめぐらしつゝ、

たてまつりし御酒ですぞ

澤山めしあがれ。

すると、建内宿禰は、御子の御爲めに、おこたへの歌として斯ううたひました。

此の御酒を

こしらへた人は

口つゞみ ひたひたうちて

歌ひつゝ こしらへたのですぞ

舞ひつゝ こしらへたのですぞ

この御酒は

この御酒は

不思議にたのしやな

さつさい！

此の歌は、みな酒宴の歌です。

帶中津日子の天皇は、御年五十二歳でおかれなさいました。御陵は河内の惠賀の長江に

あります。

應神天皇

品陀和氣の命は、輕島の明の宮にましまして、天下をお治めなさいました。

御子はみなで二十六人御座いましたが、大雀の命が太子にお立ちなさいました。

天皇はある時、大山守の御子と大雀の御子とに向つて、

「お前たちは、年上の子が可愛いと思ふか、又、年下の子が可愛いと思ふか。」

とおたづねなさいました。天皇がかやうにお尋ねなすつたのは、年下の御子、宇遲の和紀

郎子に天下を治めさせたいといふ志があつたからです。

大山守の命は、

「それは、年上の子が一番可愛いものです。」

とおつしやいました。それは、大山守の命が年上であつたからです。が、大雀の命は、天皇が、なせそんなことをお尋ねなされるのかといふことをお悟りなすつて、

「年上の子は、もう人格が完く出来てゐるのですから、別に心配する必要もありませんけれど、年下の子は、まだ充分に人格が出来上つてゐませんから、これが一番に可愛いもので御座いませう。」

とお答へなさいました。

天皇は、

「大雀のいふことは、私の思ふのと同じだ。」

とおつしやつて、それから、

「大山守の命は海や山の政治をするがよい。大雀の命は天皇を輔けてゆくがよい。宇遲の

和氣郎子は天皇の位に即くがよい。」

とおつしやいました。大雀の命は、天皇の仰せをよくお守りなさいました。

ある時、天皇は近江の國へ山を越えてお出ましになつた事がありました。その時、宇遲野の邊におたちになり、はるばると、桂川に沿うた葛野のあたりを眺めて、

千葉の

葛野を見るとき

幾百幾千の

民家が見える！

平野も見える！

とお歌ひになりました。

それから、木幡の村までおいでなさいますと、それはそれは美しい少女が路をあるいてゐました。

天皇は少女に向つて、

「お前は誰の子だ。」

とおたづねになりました。すると、

「私は丸邇の比布禮の意富美の娘です。名は宮主矢河枝姫と申します。」

と答へました。天皇は、

「では、明日還る時に、お前の家へ寄らう。」

とおつしやいました。

矢河枝姫は家へ歸つて、此のことを委しく父に物語りました。父は、

「それぢや、それは、天皇でゐらつしやるのだ。恐れ多いことだ。お仕へするがよい。」

といつて、家を飾りたてゝ待つてゐますと、次の日、天皇はお言葉に違はず、此の家をお

訪ねなさいました。

さうして、御馳走をさしあげる時に、矢河枝姫に御酒をとらせました。そこで、天皇はそ

の御酒を手にしながら、斯うお歌ひになりました。

おゝ蟹よ！

どこの蟹だ！

長路つたふ角鹿の蟹か

横に這つてゆく

どこへいつてしまふのか？

伊知遅島 三島とやつて来て

水潜る鴉鳥が 吐息するやうに

だらだら坂の近江の路を

さつさと歩いて私があると そら
 木幡の村の路で
 出あつた少女よ！
 後姿は小楯のやうにすんなりと
 齒並は椎の實のやうにかつちりと
 櫟井の丸廻坂の朱土の
 上土はあまりに赤いし
 下土はあまりに黒いし
 それゆゑに その中程の朱土を
 かんかん照る日にあてないで
 眉墨こしらへ
 くつきり描いて
 三日月型に眉尻さげた
 路で見たその少女よ！



あれやこれやと思ひし少女よ！
 かうしようあゝしようと思つた少女に
 お酒を飲みつゝ向ひあつてゐるぞ！
 並んで坐つてゐるぞ！
 其の少女を妃として、お生れなすつた御子が、かの宇遅の和紀郎子でありました。
 天皇はまた日向の國の諸縣の君の娘で、髪長姫といふ美しい少女を、宮中の小間使にしよ
 うとお喚びになりました。
 すると、太子の大雀の命は、少女が難波津で船の上に立つてゐるのを御覽になつて、あま
 りのやさしい姿に見とれ、建内宿禰に向つて、
 「あの日向の國から喚びよせた髪長姫を、お父上にお願ひして妃にしたいものだが、一つ
 願つて見て呉れないか。」
 と御相談なさいました。
 宿禰は、すぐ様其の由を申し出でました。天皇は、すぐおゆるしになつて、お酒宴をお催

しになりました。

その日、髪長姫が、お酒盃を太子にお渡しになりますと、天皇は、お歌をおうたひになりました。

おゝ 我が子らよ

野蒜摘みに 蒜つみに行かうよ

私たちの行く道の側に並んだ

香の高い花の咲いた橘の

上の枝は 鳥がつゝいて枯らしてしまふ

下の枝は 人が手折つて枯らしてしまふ

その中央の枝の 白い花に包まれた赤い實よ

紅の顔の少女こそ

ほんたうに似合ひのお妃だよ

それから、またおうたひになりました。

水のたまつてゐる

依網の池に杖をうつ

菱の殻がちくりと刺すもしらないで

尊がくりくりからむともしらないで

私は

今になつて後悔する

斯うして少女は太子のお妃になりました。太子は大さう喜んで、お歌をおうたひになりました。

した。

遠い遠い日向の

古波陀の少女は

雷のやうに聲だけきいてゐたのに

今では私の妃になつたよ

吉野の國集の人たちも、太子のお腰の太刀を見て歌をうたひました。

品陀の御太刀

大さゝぎ

大さゝぎ

お腰の太刀は

本の鋭い太刀

末の鋭い太刀

冬枯の氷れる木立のやう

枯れた木の幹のやう

さらさら輝やく太刀よ!

また、吉野の白檮生に低い横白を作つて、その横白で酒を造つて天皇に献りました。さう

して、舌鼓をうつて踊りながら歌を歌ひました。

白檮の生に

横白を作り

横白で

こしらへたお酒

おいしく聞き召し下さい

わが大君よ

この歌は、國集の人々が、土地でとれた食物を献る時に、いつも歌ふ歌です。

また、此の御代に海部や山守部や伊勢部を定めて、それぞれ取締りをなさいました。

また、大和の國に劍の池をお作りなさいました。

新羅の人たちが渡つて來ましたので、建内宿禰に命じて、堤や池で働かせ、大きな百濟の

池をお作りなさいました。

百濟王の照古王は、牡馬一匹、牝馬一匹を阿知吉師といふ人につけて献りました。それか

ら、太刀や鏡をも献りました。更に、智識の優れた賢い人があらば、貢れとおつしやつたの

で、和邇吉師といふ人に、「論語」を十巻と、「千字文」を一巻と、合せて十一巻の書物を持た

せて貢りました。また、つゞいて藝術家として鍛冶工の卓素といふ人や、織物の巧みな西素

といふ人を貢りました。更に、奏の造の祖先の人々や、漢直の祖先の人々や、酒を作るこ

とをよく知つてゐる仁番といふ人たちが、次々に渡つて參りました。仁番は、須々許

理ともいひました。

須々許理は御酒を醸造つてさしあげました。天皇は此のお酒を召し上り、ほんのり酔がまはつて来たころお歌ひになりました。

須々許理が

作つてくれたお酒で

私は酔つてしまつたわい

口もきけぬほど、酔つてしまつたわい

苦しい 苦しい

私は酔つてしまつたわい

此のお歌をうたひながら、お出ましになりました。さうして、お杖で大坂越えの路の中央にあつた大きな石をおうちになりました。すると石は忽ちに走り飛んで行きました。

「堅石も酔人を避ける」と諺にいふのはこれから出たのです。

天皇がお崩れになつて後、大雀の命は、天皇のお命令に従つて、天下の政治を宇遅の和紀郎子にお譲りなさいました。

すると、大山守の命は、天皇の仰せにそむいて、弟たちを殺し、天下を我がものにしようとして、ひそかに兵士を集め、その準備をなさいました。

ふとこの事を耳にした大雀の命は、使者を走らせて、宇遅の和紀郎子にお知らせなさいました。

宇遅の和紀郎子は、これをきいて大におどろき、兵士を河の附近にそつとしのばせ、山上には絹を桓のやうに張つて、其の中に天幕をこしらへなさいました。それから、殿侍を皇子にして、麓からよく見えるやうに高い椅子の上に坐らせ、多くの人々が敬ひ往來する場合には、必ず皇子に對するが如く丁寧なさせました。更に、大山守の命が河をお渡りになる時の爲めに楳を具へた船をつないで立派に飾りつけ、また佐那葛の根を臼でついて、滑かな汁をとつて、その船の中の竹でこしらへた踏み橋の上に塗りつけ、すぐ踏みすべつて倒れるやうに準備なさいました。さうして、御自身は、荒い布の着物を着て、すつかり若者になりました。まじ、船の一方に立ち、楳を執つていらつしやいました。

大山守の命も、ぬけ目なく、兵士を全部かくれさせ、御自分は、鎧を着物の下に着て、此の河の邊へやつていらつしやいました。

さうして、船にお乗りなさいます時に、山の天幕や絹のとばりやを仰ぎ、あの椅子に坐つてゐるのが和紀郎子だとばかり信じて、此の擧をとつてゐる若者が和紀郎子であらうとは少しも氣づかず、斯うおたづねなさいました。

「私は此の山の中に、大きな、而かも、怒りあれまはる猪がすんでゐると人づてに聞いてゐる。私はその猪を獲つて見たいと思ふのだが、うまく獲れるかどうかね。」

「さあ、出来かねませう。」
擧をとつて船を動かしながら、若者はさう答へました。

「何故だ。」

「何故といつて、時々獲らうと思つても、うまく行かないんですもの。うまく出来ないですすからね、まあ、出来ないとはいふんですよ。それは……」

やがて、船が河の中程まで来た頃、その船を急に傾けて、大山守の命を水の中へ墮しておしまひなさいました。

大山守の命は、そのまゝ、ふいと水面に浮び出て、流れのまにまにおし流されてしまひました。

流れてゆきながらも、

ちはやぶる

宇遅川の渡し場に

船漕ぐことの

速い人は

早く飛んで来てくれい

とお歌ひになりました。

すると、河の邊りにかくれてゐた兵士たちは、あちらからも、こちらからも、一時に走り出て来て、弓に矢をつがへ、逃げたまふ大山守の命をどどん川下へ流してしまひました。

とうとう命は訶和羅の前といふあたりまでおしながされて、そのまゝ、沈んでおしまひなさいました。

そこで、鉤をもつて来て、川底をあちらこちらと探りますと、命の衣の下に着てゐらつしやつた鎧にふれて、訶和羅……と音をたて、鳴りました。訶和羅の前といふ名が、その時に出来ました。

やがて、屍をおかき出しなさいました時に、和紀郎子は、悲しんで歌をお歌ひになりまし
た。

ちはやびと

宇遅の渡しの

渡り瀬に立てる

梓弓檀弓

射きつてやらうと

心には思ひながら

射殺してやらうと

心には思ひながら

第一には

天皇のお嘆きを思ひ出し

第二には

妹を思ひ出し

いたましく

それを思ひ出し

悲しく

これを思ひ出し

とうとう射きらないでやつて来た

梓弓 檀弓

後に大山守の命のお骸は那良山へお葬しなさいました。

大雀の命と宇遅の和紀郎子とのお二方が、天下を譲りあつてゐらつしやる間に、海人が、
海でとれた魚を貢りました。大雀の命へ献ると、命は和紀郎子へ貢れとおつしやいまし
た。和紀郎子へ献ると、大雀の命へ貢れとおつしやいました。かうして、幾度も幾度も譲り
あつてゐる間に、幾日かたちちました。海人はもうすつかり往來に疲れて、泣き出してしま
ひました。

「海人なれや、己が物から音泣く。」

といふ諺がこれから出ました。「海人であるから、自分の持つて居るものの爲めに泣かねばならぬ」といふ意味であります。

が、宇遲の和紀郎子は早くお崩れになりました。で、大雀の命が、天下をお治めなさいました。

また、昔、新羅の國王に、一人の子がありました。名は天の日矛と申しました。天の日矛は、遙々と内地へ渡つて來ました。何故、新羅あたりから遙々渡つて來たのでせう。其のわけはかうであります。

もと、新羅の國に、一つの古い鉛色の水をたへた沼がありました。處の人は、阿具奴摩とよんでゐました。

ある日、此の沼の邊りを通りかゝつた一人の少女が、歩みつかれて草の上にとつと腰を下し、一休みしました。さうして、うとうとしてゐると、忽ちに太陽の光が虹になつて、此の少女をめぐけて輝やきました。

すると、また一人の貧しい若者が、これを見つけて不思議に感じました。さうして、毎日

その少女の動作を伺つてゐました。少女は、あの沼の邊りであつたとした日から身ごもつて赤い玉を産み落しました。

かの若者は、その赤い玉を貰ひうけて、いつもいつも布に包んで腰につけてゐました。此の若者は、山の谷間に田を營つてゐたので、耕作する人たちの飲むもの、食べるものを、大牛の背につけて、山の谷間へ入つて行きました。すると、此の國の王様の子で、天の日矛といふのに出逢ひました。

日矛は、若者をとらへて、

「お前はなぜ飲むものや食べるものを牛に背負はせて山の中へ入つて行く、きつと此の牛を殺して食ふつもりだらう。」

といつて、ひつとらへて牢獄の中へ入れようとした。若者は、

「私は決して牛などを殺さうと思つてはるません。田で働いてゐる人に食物をもつて行つてやるので御座います。」

といひました。が、どうしてもゆるしてくれませんので、腰の赤い玉を解いて、その天の日矛に贈りました。

天の日矛は、若者をゆるしてその玉を家にもち歸り、床の邊りにそつとおきました。すると、玉は忽ち美しい少女に化けてしまひました。

天の日矛は、此の少女を自分のお嫁にしました。

少女は、いつもいつも珍らしい食物をこしらへて、夫にすすめましたが、しまひには、天の日矛が、だんだんと心奢りをして来て、少女をなぐるやら、うつやら、蹴るやらしました。そこで、遂に、少女は、

「どうせ、私はあなたのお嫁にはなれない者ですから、私は祖の國へ歸つて行きます。」

といつて、ひそかに小船に乗り、内地へ逃げて来て難波の國に留まつてゐました。

天の日矛は、妻が内地へ遁げて行つたとき、すぐ追つかけて来て、難波の國へ入らうとしましたが、渡の神に遮ぎられてはいることが出来ませんでした。

そこで、日本海へひきかへして、多遅摩の國へつきましました。天の日矛は、其の折、玉つ寶といつて、玉を二飾と、浪振る比禮の舵と、浪切る比禮の櫂と、風振る比禮の旗と、風切る比禮の帆と、奥津鏡、邊津鏡と八種類の寶物をもつて來ました。

此の寶は、出石神社の神様です。

此の神のお娘に、伊豆志袁登賣といふ者がありました。多くの神々は、どうかして、お嫁に欲しいものだと思つてゐましたが、ついその手づるがありませんでした。

すると、こゝに二人の若い神がありました。兄を秋山の下氷壯夫と號び、弟を春山の霞壯

夫と號びました。その兄がある日弟に、

「私は、どうかしてあの伊豆志袁登賣をお嫁に欲しい欲しいと思つてゐるが駄目だ。お前は、お嫁にすることが出来るか。」

といひました。

「易いことです。私ならすぐお嫁にして見ます。」

と答へました。

すると、兄は、

「もしお前がその少女をお嫁にしたなら、私は着物を全部あげ、私の背の高さ程の甕の中へお酒を一杯に入れ、山や河の食物をことごとく備へてお前に御馳走してやらう。」

といひました。

弟は、早速、兄のいつた通りをお母さんに話しました。すると、母親は、藤のつるをとつて来て、一夜の間に、着物も袴も足袋も沓もすつかりこしらへました。さうして、それを着せて、弓や矢を作つてもたせ、少女の家へやりました。すると、着物も弓矢も沓も、悉く藤の紫色の美しい花になつてしまひました。春山の霞壯夫は、喜んで少女の家へつくと、弓矢をそつと家の前にたてかけておきました。伊豆志袁登賣は、不思議に思つて、その藤の花の弓矢をちつと見つめてゐましたが、やがて手にとつて家へもちこみました。弟は、その後ろからそつと家の中へ入りこむことが出来ました。

幾月かぐたちました。玉のやうな子供が生まれました。

そこで、兄に、

「私は伊豆志袁登賣を妻にしましたよ。」

と申しました。

すると、兄は、弟がすでに結婚したと知つて非常に怨み、色々の約束をみな取り消してしまひました。

弟は、母に其の由をつげました。母は、

「此の世に生き長らへてゐる間は、神のやうな正しいことをしなければなりません。あれは淺はかな心をもつてゐる多くの人たちに見習つて、約束を守らないのだ。」

といつて兄を恨みなさいました。

さうして、母は、伊豆志河の、河の中にある島の竹をきつて来て、目の荒い籠をこしらへ、その中へ、河原の小石と鹽とを混ぜて、竹の葉で裏み入れ呪はせました。

此の竹の葉が青々してゐるやうに青くなれ！

此の竹の葉が萎んでしまふやうに萎んでしまへ！

此の鹽が盈ちてくるやうに盈ちよ！

此の鹽が乾いて行くやうに乾いてしまへ！

此の石の沈んで了ふやうに沈んで病氣になつてしまへ！

斯う呪つて竈の上に置かせました。

それが爲めに、兄は、八年の間に、すつかり、体のうるほひがなくなり、乾枯びたやうに病みついて了ひました。

兄は、泣き悲しんで、母にその罪をわびました。母は、やつとのこと、それをゆるしてやりました。そこで、兄はもとの如く幸福に暮すことが出来ました。

應神天皇は御年百三十歳でお崩れになりました。御陵は河内の國惠賀の裳伏の岡にあります。

下 卷

二、煙^{けむり}
立^た
つ
村^{むら}

不
卷

仁徳天皇

仁徳天皇

大雀の命は、難波の高津の宮にましまして、天下をお治めなさいました。

天皇には、皇子が六人ありました。太子は伊邪本和氣の命と申しました。

此の御世に、天皇は、皇后、石の姫の御名代として、葛城部といふ人民の群をお定めになりました。また、太子には壬生部を、水齒別の命には蝦部を、大日下の王には大日下部を、若日下部の王には若日下部をお定めになりました。

また、奏人を役つて、茨田の堤や、三宅をお作りになり、また丸邇の池や依網の池を作つたり、難波の堀江を堀つて海までつゞけたり、小椅の堀江を堀つたり、墨の江の港を定めたりなど、いろいろ民のためになることをなさいました。

天皇は、ある時、高い山に登つて、四方の國々をながめ渡し、

「あゝ、國々の村落からはちつとも烟がたゝない。國はあんなにまで皆まづしいのだ。今から三年の間、一切、人民の租税と夫役とをゆるしてやるがよい。」

とおつしやいました。
さうして、御殿の屋根や壁が破れたり壊れたりして、さらさら雨がもれ落ちても、決して
お修繕にはなりませんでした。樋を雨のものとるところに受けて、御自分は雨の漏らない部屋に
おうつりになつてゐらつしやいました。

その後、國々の村落を御覽になりますと、烟が一面に立ちのぼつてゐました。
天皇は人民が富み榮えたのだとお思ひになつて、前の如く課や役を仰せつけになりました
が、人民は誰一人として苦しむものはありませんでした。
それ故に、此の御世を稱へて、聖天子の御世と申しました。

皇后の石の姫は、非常に嫉妬心の強いお方でありましたので、天皇のお側に侍つてゐる官
女たちは、お部屋の中を伺くことも出来かねました。もし下手に天皇に口でもさかかうものな
ら、足すりをしてひどくお怒りなさいました。

吉備の國、海部の直の娘に、黒姫といふそれはそれは美しいしとやかな娘がありました。
天皇は、その黒姫をお喚びよせになつて、お側にお使ひなさいましたが、黒姫は、皇后のお



律光菴寫

嫉いたみを恐おそれて、ついに故郷こきやうへ逃にげ歸かへつてしまひました。

天皇てんのうは、高台たかどのに登のぼり、黒姫くろひめの船ふねが港みなとを出でて行ゆかうとするのを、おながめになつて、

沖おきの方ほうには

小舟こぶねがつらなつてゐる

黒崎くろさきの

まさづこ、黒姫くろひめよ

國くにへ歸かへつてしまふのか――

とお歌うたひになりました。

皇后きさきは、此この歌うたをおき、なすつて大變たいへんに恐おそり、海うみへ人ひとを遣やつて黒姫くろひめを船ふねから下くださせ、歩あか

せてお歸かへしになりました。

天皇てんのうは大たいさう可か哀あさうに思おもひ召めして、

「わしは淡道あはぢ島見物しまけんぶつに行ゆきたいから……」

と云いつて、皇后きさきを欺あざむき、お出でましになりました。さうして、淡道あはぢ島しまから、吉備きびの國くにを遙はる々

と望のぞんで、



おしてるや

難波の崎よ

出でたちて

我が國見れば

淡道島

おのころ島

檳榔の小島も見ゆ

佐氣都島も見ゆ

とお歌ひになりました。

天皇は、更に、其の島から吉備の國へお渡りになりました。黒姫は、吉備の國の山方とい

ふところにお留め申して、御馳走をいたしました。

それから、また、羹を煮やうといふので、その野に生えてゐる菘菜を採りました。天皇

は黒姫が菘菜を採んでゐる野へお出ましになつて、

山の畑に

蒔いた菘菜を

吉備の人と

一緒に採めば

楽しいことである

とお歌ひになりました。

後、天皇がお歸りになる折に、黒姫は歌を献りました。

大和の方へ

西風が吹きあげて

雲がちぎれ

ちぎれ離れてゐても

私は忘れは致しません――

また、

大和の方へ

往くは 誰が夫か

葉かげの水の

下をかくれ流れつゝ

往くは 誰が夫か

これより後、皇后はお酒宴をお催しなさいます爲めに、葉の先端が尖つて三岐に分れてゐる柏の葉を採らうとして、紀伊の國までお出ましになりました。

さうして、お船にその御綱柏を山の如くに積み、お還りにならうとしました。すると、水取の司に使はれてゐる、吉備の國、兒島生れの仕丁が、丁度、自分の國へ歸らうとして、難波の大渡で、一足おくれた倉人女の船に出あひました。仕丁は、

「天皇は、近頃、毎日、八田の若郎女をお可愛がりになつて、殆ど毎日遊びくらしてゐらつしやいますのに、皇后様は何も御存じないのか、遠くへ遊びに出ていらつしやいます。」と語りました。

倉人女は、此の話をきいて、皇后のお船に追ひつき、仕丁が言つたとほりのことを事細かに申しあげました。

皇后は大層お怒りなすつて、其の船に載せてあつた御綱柏を、悉く海の中へ投げ棄て、お

しまひなさいました。

さうして、すぐさま宮中へはお歸りなさないで、わざわざ堀江を浜つて、河づたひに行けるところまでお上りになり、山城の國までおいでになりました。

其の時、お歌ひなすつた歌は、

つぎねふや

山城川を

川のぼり

私の上れば

川の邊に

生え立つてゐる

鳥草樹!

鳥草樹の

その下に

生え立つてゐる

葉の廣い

こもりしげつた眞椿！

その花の

照り輝やき

その葉の

廣がりぬますは

わが大君か

それから山城の國を廻り、那良の山口まで參つて、またお歌ひなさいました。

つぎねふや

山城川を

宮へ上り

私の上つて行けば

あをによし

奈良をすぎ

小さな楯

大和をすぎ

私が見たい國は

葛城の高宮

私の家の近く

斯う歌ひながら、暫く筒木の奴理能美といふ韓の人の家へおはいりになりました。

天皇は、皇后が山城から大和へお上りになつたとおきくなすつて、舍人の鳥山といふ人を

使はされました。その時、歌をお送りなさいました。

山城へ

追つかけてゆけ

鳥山よ

追つかけい！ 追つかけい！

愛しきわが妻に

會へぬことはよもあるまい……

また、つゞいて丸邇の臣口子を遣はして、歌をおうたひになりました。

御室の

その高城なる

大猪子が腹

おほのこが腹にある

きも向ふ

心にさへも

思はないでゐるのかしら――

も一つの歌は、

つぎねふ

山城の少女が

小鍬を持つて

掘つた大根

根は白い――

口子の臣が、此の歌を申しあげやうとしますと、運わるくも、雨がざあざあ降つて來まし

た

が、口子の臣は、その雨もさけず、しとゞにぬれたまゝ、南の戸口に蹲まつて申しあげました、すると、皇后は北の戸口へ行つておしまひになりました。で、あわてゝ北の戸口へ行つて蹲まつて歌を歌ひますと、また、南の戸口へお行きになりました。斯うして、口子の臣はあちらへ行き、こちらへ行きして、庭の中に跪いたために、庭の窪みに溜つた水は、腰のあたりまでぬらしてしまひました。

それに、口子の臣は、紅い紐のついた青葉染の着物を着てゐたものですから、雨と庭の溜り水とが、その紅い紐をぬらして、青い着物がすっかり真紅に染つてしまひました。

皇后のおそばにお仕へしてゐた口子の臣の妹の口姫は、これを見て歌ひました。

山城の

筒木の宮に

物申す

兄様

私は涙ぐましく思ひます

皇后は口姫にそのわけをおきくになりました。

口姫は眼に涙を一杯ためて、

「あれは私の兄様です。」

と申しました。

口子の臣は、また妹の口姫と奴理能美と三人で相談をして、

「皇后がおいでになりましたのは、奴理能美が養つてゐる虫で、一度は匂ふ虫となり、一

度は卵となり、一度は飛ぶ鳥となる不思議な三色に姿の變る虫を御覽になる爲めです。別に

どうするといふお考へは御座いません。」

と天皇に申しあげました。

すると、天皇は、

「さうか、そんな不思議な虫が居るのか、では、私も見に行かう。」

とおつしやつて、大宮をおでましになり、奴理能美の家へおつきになりました。奴理能美は、

家に養つてあつた三種の虫、即ち蠶を皇后にさしあげました。その時、天皇は皇后のゐ

つしやる御殿の入口におたちなさつて、

つぎねふ

山城の娘が

小鋏を持つて

掘りかへす大根の葉の

さわさわと　ざわざわと

お前が言ふものだから

うちわたす

孫枝の生えるやうに

幾度も使をよこして

とうとう私まで來たのだよ

此の天皇のお歌と、皇后のお歌とは、志都歌の返歌と申します。

天皇は、八田の若郎女を戀ひ、

八田の
一本管は

子も持たずに

枯れてしまふであらう

あたら 菅原

われこそ

進んでお前を愛する

あたら 清し女

とおうたひになりました。八田の若郎女は、

八田の

一本管は

一人居りましても

大君が

よしと聞き召せば

一人居りましても

とお答へしました。

そこで、天皇は八田の若郎女の御名代として、八田部をお定めなさいした。

天皇は、また、御弟の速總別の王を媒人として、お腹異ひの御妹、女鳥の王をお召しにな

らうとしました。が、女鳥の王は、速總別の王に、

「皇后の御心を恐れて、八田の若郎女さへお召しになることが出来ませんでした。それ

故、私はお仕へいたしません。私はあなたのお側に居たう存じます。」

とおつしやいました。

速總別の王は、そのまゝに女鳥の王を妻とし、天皇には御返事をなさいませんでした。

天皇は御自ら女鳥の王のお家へお幸なさいまして、御殿の闕の上に立つてゐらつしやいま

した。

女鳥の王は、機で布を織つてゐらつしやいました。

女鳥の

わが大王の

織つてゐらつしやる服は

誰のだらうか

とお歌ひになりました。女鳥の王は、

高行くや

速總別の

御召ものにするためよ

と歌でお答へになりました。

天皇は、女鳥の王の心情の中をお氣づきになつて、そのまゝ御殿へお歸りになりました。

此の時、丁度、速總別の王が歸つていらつしやいました。女鳥の王は、斯うお歌ひなさい

ました。

雲雀は

天を翔る

高行くや

速總別

鷓鴣とつてやりなさい

此の歌をおきゝなすつた天皇は、大軍を起して、速總別を殺してしまはうとなさいまし

た。それは、歌の意味が「あの小さな雲雀でさへ天を飛びまはるではありませんか。あなた

は、空高く飛ぶことの出来るはやぶさですから、鷓鴣の天皇をおとりなさいな。」といふので

したからです。

速總別の王は、女鳥の王と共に逃げのびて、宇陀から伊勢へ越さうと、倉椅山を騰つてお

ゆきになりました。

梯立ての

倉椅山は

峻しいから

岩にとりつきかねるでせう

私の手におすがりなさい

と速總別の王はお歌ひなさいました。また、

はしたての

倉橋山は

嶮しいけれど

妻と二人で登れば

嶮しいとも思はない

と口ずさみながら、女鳥の王のお手をひいてお逃げなさいました。さうして、宇陀の蘇邇といふ處までいらつしやつた時に、天皇の大軍に追ひつかれて、遂に殺されてしまひました。

その時の將軍の一人、山部の大楯の連は、女鳥の王のお手にお纏きになつてゐた玉釧をとつて來て、ひそかに自分の妻に與へました。

それから暫く後の事でした。宮中で酒宴をお催しになつた時に、氏々の娘等が皆列席いたしました。

大楯の連の妻も、かの玉釧を自分の手くびに纏いて參りました。

皇后、石の姫は、自ら盃を取つて、氏々の娘たちにお酒をたまはりました。

その時、ふと、大楯の連の妻が手くびに纏いて居る玉釧を見つけ、彼には盃を與へず、外へ追ひ出しておしまひなさいました。

さうして、大楯の連をよびよせ、

「あの速總別や女鳥の王たちは、あまりに道はづれたものどもであるから、お懲らしめになつたのに、別段不思議なことはありません。然るに、お前は、お前の御主君の御手におまきなすつてゐる玉釧を、而かも、まだお体が温かいうちに、剝ぎとつて來て、自分の妻に與へるとは不届千万だ。」

とおつしやつて、とうとう死刑に行はれました。

また、或る時、天皇は、酒宴の爲めに攝津の國の日女島へお出ましになりました。

すると、其の島に雁が卵を生んでゐました。

そこで、建内宿禰を召し寄せて、歌で、雁の卵が生れた有状をおたづねになりました。

たまきはる

内の朝臣よ

お前こそは
世の長老だ

そらみつ

日本の國に

雁が子を産むときいてゐるかい

建内宿禰は歌でお答へいたしました。

高光る

日の御子よ

よくこそおたづねなさいました

まことによくおたづねなさいました

私こそは

世の長老ですが

そらみつ

日本の國に

雁が子を産むとは

きいたことがありません

かういひながら、お琴をいたゞいてそれに合せて歌ひました。

あなたが

天下をお治めなさいますめでたい瑞兆として

雁は子を産んだのでせう

此の歌は祝歌の片歌であります。

此の御世に、免寸河の西の方に、一本の背の高い高い樹がありました。

その樹の影が、朝日にあたつては淡道島まで逮び、夕日に當つては高安の山を越しまし

た。此の樹を枝り倒して、船をお造りになると、捷く捷く走る船が出来ました。その船の名

は枯野と呼びました。

船は、朝夕、淡道島の清水を汲んで来て、献る爲めに使ひました。

その後、此の船が破れたので、それを鹽焼く薪にかへて、鹽を焼きました。それから、そ

の焼け残りの木をとつて来て琴を作りますと、その響は、七つの村々までも響きわたりました。

枯野の船を

鹽に焼き

その残りて

琴をつくり

かきならすと

由良の海峽の

荒瀬の中の

沈んでゐる岩に

ゆれ動きながら立つてゐる

海松の枝のやうに――

さや さや さや さや……

天皇は御歳八十三歳でした。御陵は毛受の耳原にあります。

一一、探湯の釜

履中 天皇

伊那本和氣の命は、伊波禮の若櫻の宮にましまして、天下をお治めなさいました。

天皇が、はじめ、難波の宮にいらつしやいました時、大嘗のお酒宴を催して、お酒に酔つて寝ておしまひになつたことがありました。

其の時、御弟の墨江の中王が、わるい心を起して、御殿に火をつけました。すると、倭の漢の直の祖先で、阿知の直といふ人が、竊に天皇を背負ひ出し、お馬にのせて、どんどん倭の國へ逃げました。

多遲比野まで参りますと、天皇は、ふつとお眼寤めになつて、

「こゝはどこだ。」

とおつしやいました。

阿知の直は、

「墨江の中王が御殿に火をおつけになりました。で、私は陛下のお供をして、倭の國へ逃

げて行くので御座います。」
と申しました。

そこで、天皇は、斯うお歌ひになりました。

丹比野で

寝なければならぬと知つてゐたなら

防壁も

持つてくるべきものだつたのに

寝なければならぬと知つてゐたなら

波邇賦坂までおいでになつて、難波の宮をお望みになりますと、皇居の燃える火は、赤く

柄やいてゐました。

天皇は、またお歌ひになりました。

埴生坂に

私が立つてながめて見ると

まつ赤な大空の



律光謹画

埴 生 坂

あの燃さかる家つゞきが

妻の家のあたりであらうに――

それから、大坂の山の口までいらつしやいますと、一人の女が、坂を下つて來ました。その女は、

「弓や刀をもつた人たちが、大勢で此の山を塞いで居りますよ。路を廻つて當岐麻道を越しておゆきなさいな。」

と申しました。

天皇は、

大坂で

出遇つた女に――

路をきけば

まつすぐに行けとはいはないで

當岐麻路へ行けといふ

と歌ひながら、當岐麻路から越して、倭の石の上の神の宮へおつぎになりました。

すると、御弟の水齒別の命がわざわざたづねて来て、對面したいと申し出られました。天皇は、

「お前も或は墨江の中王と同じ心であるか知れないから、私はものをいふまい。」とお答へなさいました。

「いゝえ、私は決して悪い考をもつてゐる者ではありません。墨江の中王と同じやうな心を抱いてゐるものでは御座いません。」

と申し上げなさいましたが、天皇は、

「然らば、今すぐ還つて行つて、墨江の中王を殺して來い。さうすれば會ふ。」とおつしやいました。

水齒別の命は、すぐに難波の國へ還つて、墨江の中王に近くお仕へしてゐる隼人の曾婆加理を欺いて、

「もしお前が私の言ふことをよくきいたなら、私が天皇となつた暁には、お前を大臣にして天下を治めて見ようと思ふ。どうだ。」とおつしやいました。

曾婆加理は「一も二もなく、

「仰せを承りませう。」

と申しました。

そこで、その隼人に賞與をどつさり與へて、

「それならお前の主君を殺してまわれ。」

とおつしやいました。

曾婆加理は、自分の主君が便所へおはいりになつた隙に、矛をふりかざして、遂に刺し殺してしまひました。

水齒別の命は、曾婆加理をつれて倭の國へかへつていらつしやいます時に、大坂の麓でふつと思ひついて、

「曾婆加理は、私の爲めには大功をたてたものではあるけれども、自分の主君を弑し奉つた奴だ。實に道はづれた奴だ。しかし、その功に對しては、相當の報酬をしてやらなければ、私は嘘つき者とならねばならぬが、もう、約束通りの事をしてしまへば、彼の心は實におおるべきものだ。とにかく、功に對しては報いてやるとしても、身体だけは殺してし

まはねばならぬ。」

とお考へになりました。

そこで、曾婆加理にむかつて、

「今日はこゝに留つて、まづ大臣の位を授けやう。而して、明日出かけるとしよう。」

とおつしやつて、山の麓にお留りになり、俄に假の御殿を作つて、酒宴をお催しになりました。

した。さうして、その隼人に大臣の位を與へて、百官の人々に拜ませなさいました。

隼人は、大喜びで、私の志望は達したのだと思つてゐました。

命は、それから、

「今日は、大臣と同じやうに酒を飲みませう。」

とおつしやつて、御一緒に飲みました。

さうして、面がかくれてしまふやうな大きな盃になみなみとお酒がつかれました。

まづ王がお召しになつて、後隼人が飲みました。

その隼人の唇が、盃にふれると、盃で顔はかくれてしまひました。

王は、席の下にかくしてあつた太刀をとり出し、一打に隼人を斬殺してしまはれました。

かくして、翌日お上りになりました。

倭の國へおつきなさいますと、

「今日は、此處に留つて祓をなし、明日、石の上の神の宮に参拜しよう。」

とおつしやいました。

さうして、石の上の神の宮におまゐりになつて、天皇に、

「悪い人々を平げて参りました。」

とおつしやいました。さうして、色々のお話をなさいました。

天皇は、阿知の直を藏の官といふ倉庫の役人になさいました。それから、田地を定めたり、伊波禮部をお定めになつたりなさいました。

天皇は、御年六十四歳でおなくなりになりました。御陵は毛受にあります。

反正天皇

水齒別の命は、多治比の柴垣の宮にましまして、天下をお治めなさいました。
天皇は、お身体の長さが九尺二寸五分、御齒の長さが一寸、その廣さが二分、上の齒も下の齒もきつちりと齊つてゐて、恰も珠を貫いたやうでした。
天皇は御年六十歳でおなくなりになりました。御陵は毛受野にあります。

允恭天皇

男淺津間の若子の宿禰の命は、水齒別の命の御弟で、仁徳天皇の御子でいらつしやいます。
遠津飛鳥の宮で天下をお治めになりました。
御子は九人ほどございましたが、三人目の穴穗の命が次の天子におなりなさいました。大長谷の命も天下をお治めなさいました。

天皇は、はじめ、御位にお即きなさいます時に、

「私は、長い長い病にかゝつてゐるから、皇位を繼ぐことは出来かねる。」
とおつしやつて、強く御辞退なさいました。

が、皇后をはじめとして、數多の大臣たちが、たつてお願ひ致しましたので、天下をお治めなさることになりました。
時に、新羅の國王が、御調ものを八十一艘の船に積んで献りました。御調の使者は、金波鎮漢紀武と申しました。此の人は、醫藥のことをよく知つてゐました。そこで、天皇の御病氣をお癒し申しました。

天皇は、天下の人たちが、氏や姓名を誤つて用ゐてゐることを大さうおなげきになつて、味白禱の言八十禍津日の神の大前に、玖訶瓮といふ湯わかしの大釜を据ゑて、探湯を行ひ、多くの部族の氏や姓名をはつきりお定めになりました。探湯といふのは、神に誓つて、熱湯の中に手を浸し、罪があるかないかを確かめる裁判法であります。もし罪のあるものは、忽ち手がたゞれて了ふのであります。

また皇子たちの御爲めに、輕部・刑部・河部などをお定めになりました。
天皇は、御年七十八歳でおなくなりになりました。御陵は河内の惠賀の長枝にあります。

天皇がお崩れになつてから、皇子の木梨の輕の太子が、お位をおつぎになるべき筈でしたのに、太子は、輕の大郎女を妻になさいました。輕の大郎女はまた衣通の王とも申しました。それは、お体の光がお着物の外まで光り通つてゐたからなのです。こんなことが原因で、天下の人々や百官の役人どもは、皆輕の太子に背いて、穴穂の御子に従ひました。輕の太子は畏れて、大臣の大前小前の宿禰の家へ逃げ込んで、弓や刀を齊へて戰の準備をなさいました。其の時に作つた矢は、鏃を銅でこしらへましたので、その矢を輕箭と申しました。穴穂の御子もまた弓矢をお作りなさいました。此の御子のお作りになつた矢は、今の矢と同じく、鐵の矢でしたから、穴穂の箭と申しました。
穴穂の御子は、大軍を率ゐて、大前小前の宿禰の家をお圍みなさいました。さうして、宿禰の城の門まで參りますと、雹がばらばらとふつて來ました。そこで、御子は、聲をあげて、
大前小前の宿禰の

城門の蔭へ
寄つて來い
雨はやむだろ

とお歌ひなさいました。
すると、大前小前の宿禰は、手を舉げ、膝を打ち、踊りながら、飛びながら、

宮人の
脚に結んだ小鈴が
ちやらりと落ちたと
宮人 さわぐ
里人 さわぐな

と歌ひ、御子の側へやつて來て、
「陛下の皇子様、どうぞお兄様をお攻め下さいますな。弟としてお兄様をおせめになるならば、きつと人々は笑ひませう。私がいゝやうにいたしますから……。」
といひました。

穴穂の御子は、軍勢を率ゐてお歸りになりました。
大前小前の宿禰は、輕の太子を捕へて、穴穂の御子にさしあげました。太子は、捕はれな
から、

天飛む

輕の少女よ

そんなに哭くと

人が不思議に思ふぞ

羽狭の山の鳩のやうに

そつと泣いておくれ

とお歌ひになりました。また、

天飛む

輕の少女よ

そつと

私に別れに来ておくれ

輕の少女よ

とおうたひなさいました。

輕の太子は、遠く伊豫の道後の温泉へ流されてしまひました。

いよいよ流される時に、

空をとぶ

鳥も私の使だよ

鶴のなき聲が

きこえた時は

私の名をたづねておくれ

と涙をためておうたひなさいました。

妃の衣通の王は

夏草の生えてゐる

あひねの濱の

蠣貝に足を踏みつけなさいますな

路をよけていらつしやい
とおうたひなさいました。
あまりに太子の御身の上が案じられましたので、妃は遠い遠い路を、四國のはてまで追ひ
かけておゆきなさいました。

あなたに別れてから

長い月日がたちました

お迎へにまゐりませう

もうお待ちすることは堪えられませぬから――

とうたひながら、國のはての温泉までいらつしやいますと、太子は涙をたへておよろこ
びなさいました。

こもりくの

初瀬の山の

大きな山のはざまには

青い幡をはたはたたて並べ

小さな山のはざまには

白い幡をたてならべて

その間の大きな丘の頂に

お前は私の墓場を定めてくれた！

あはれわが妻よ！

楓の弓の

倒れ 轉び つまづきつゝも

梓の弓の

立ち 起き 走りつゝも

私をたづねて来てくれた！

あはれわが妻よ！

といふ意味のお歌をおうたひなさいました。

太子は、また、

こもりくの

初瀬の川の
上つ瀬に……

と次の歌をうたひながらおなくなりなさいました。

安 康 天 皇

穴穂の御子は、石の上の穴穂の宮にましまして、天下をお治めなさいました。

天皇は、御弟の大長谷の王子の爲めに、坂本の臣たちの祖である根の臣を、大日下の王の許へお遣はしになつて、

「お前の妹、若日下の王を大長谷の王子の妃にいたしたいと思つてゐるが、どうかさしあげてくれまいか。」

と仰せになりました。

大日下の王は、頭を四度もべこべことさげて、

「或はさういふお話があるかも知れないと思ひまして、外にも出さないで置きました。ま

ことに恐れ多い事で御座います。仰せのまゝ進りませう。」

とおつしやいました。が、言葉だけで申しあげるのは失禮だと思つて、御結納の印として押木の玉纒といふ玉をちりばめた冠を持たせてさしあげました。

根の臣はその玉纒をそつとぬすみとり、大日下の王のことを悪くいつて申しあげました。

「あの大日下の王は、勅命をお受けにはならないで、俺の妹は、あんな同じ親族である大長谷の王子の下敷にはさせはしないぞ」と怒鳴り、刀の束に手をかけ眼をいからせて叱りかけました。」

と申し上げました。

天皇は、大さうお怒りなすつて、遂に大日下の王を殺し、其の王の妃、長田の大郎女をつれて来て、御自分の皇后になさいました。

その後、天皇は御殿でうとうとと書寢をしていらつしやいました。その時、皇后にむかつて、

「お前は何か考へてゐることがあるか。」
とおつしやいました。皇后は、

「いゝえ、別に何も考へてはゐません。陛下のおいつくしみを被つてゐますのですから……。」

とおつしやいました。

その折、皇后の前にお生みになつた目弱の王が、御殿の下で遊んでいらつしやいました。お年は七歳でございました。

天皇は、此の年若い王子が御殿の下に遊んでいらつしやるとは夢にも知らず、皇后にむかつて、

「私はいつも心に思つてゐることがある。何かといへば、それは、お前の子の目弱の王のことだ。大きくなつてなら、私が、あの子の父を殺した事を知つて、悪い心を抱くかも知れないからだ。」

とおつしやいました。

すると、御殿の下にかくれて遊んでいらつしやつた目弱の王は、此の言葉をきいて、ひそかに天皇の寢息をうかゞひ、お枕もとにあつた太刀をとつて、天皇を斬り殺してしまひました。

さうして、自分は、葛城の圓の大臣の家へ逃げ込んでしまひました。

その時、天皇は御年五十六歳でいらつしやいました。御陵は菅原の伏見の岡にあります。

其の頃、大長谷の王子は、まだ、ほんの少年でいらつしやいましたが、此の事をおきゝなさいまして、大に怒りなげき、たゞちに、兄様の、黒日子の王の御許に参り、

「誰かゞ天皇を弑したといふことだ。どうしたらよいのでせうか。」

とおつしやいました。黒日子の王はちつとも驚かないで、そんなことがあつてなるものかといつたやうな顔で、平氣でいらつしやいました。

大長谷の王子は、かつと怒つて、お兄様を罵り、

「天皇は、第一に我が國の天子様でいらつしやるぞ。第二に、我々の兄様でいらつしやるぞ。それにもかゝはらず、何だ、たのみ甲斐もなく、人が兄様を弑したことをきいてゐながら、驚きもしないで、平氣で居るとは！」

と叫び、その衿をひつつかんで、外へひき出し、刀をぬいて打ち殺しておしまひなさいました。

それから、も一人の兄様の白日子の王の御許へ行つて、前の如くお告げなさいましたが、此の御子も、また、黒日子の王の如く、平氣でいらつしやつたので、忽ち、その衿をつかんで引き出し、飛鳥の小治田までつれて来て、穴を掘り、立つたまゝ埋めてしまはうとなさいました。さうして、石や土を腰のあたりまでどンドン投げ込んで埋めますと、二つの眼が飛び出して、そのまゝおなくなりなさいました。

そこで、大長谷の王子は、大軍を率ゐて、いよいよ圓の臣の家をお圍みなさいました。圓の臣もまた大勢の兵士をあつめて待ちうけました。

戦ははじまりました。射る矢は、恰も葦が散つて来るやうでした。

大長谷の王子は、矛を杖について、圓の臣の家に向ひ、

「私が前に頼んだ少女は、此の家の中に居るか。」

とおつしやいました。

圓の臣は此のお言葉をきいて急いで外に出て來ました。さうして、腰の刀を解いて、八度も頭を下げ、

「先日おたづね下さいました娘の韓姫は、お仕へいたしませう。また、御料地として、葛城の五つの庭苑とその園丁たちを献りませう。しかし、娘はたゞ今すぐ献るわけには参りません。往古から今に到るまで、臣下の者が、王子の宮殿にかくしていた事はいけません。王子が臣下の家にかくれなさいましたことは、まだ耳にしてゐません。思ふてゐますが、私が如何に力をつくして戦ふとも、勝つことは出来ません。しかし、私を信じて私の家へお入りなさいました王子は、たとひ私が死ぬやうなことがあつたとしても、お見棄てするわけにはまゐりません。」

ときつぱりいひ放し、太刀を手にとつて逃げ還り、また散々に戦ひました。併し、遂に力つき、矢もつき、運命もつきました。

そこで、目弱の王にむかつて、

「私は痛手を負ひました。矢もなくなつてしまひました。もう今は戦ふことすら出来ません。どうぞいたしませう。」

と申しました。

目弱の王は、ちつと圓の臣の顔を見つめて、

「しからはもうどうする手だてもない……。私を殺しておくれ。」
とおつしやいました。
圓の臣は、涙ながらに刀を王の胸にあて、刺し殺し、自分はかへす刀で頸を貫いて死んでしまひました。

これより後のことです。近江の國、佐々紀の山に韓俗といふ人がありました。

「近江の國の久多綿といふところの蚊屋野に、猪や鹿がたくさんに櫛んでゐます。立つてゐる足は丁度萩の原の如く、頭からつき出した角は、恰も枯樹が並んでゐるやうで御座います。」

と、大長谷の王子に申しあげました。

大長谷の王子は、市邊の忍齒の王を誘つて、近江の國へお出ましになりました。さうして、蚊屋野までいらつしやいますと、別々に假の御殿をたて、お宿りになりました。

次の朝、まだ日も出ず、あたりのほの暗い頃はひに、忍齒の王は、別段何といふわけもなく、お馬に乗つて、大長谷の王子の假の御殿の傍へお出かけになりました。

さうして、大長谷の王子のお伴の人に向つて、

「まだお眼が寤めぬのかね、早くお起しなさい。夜はもうあけてしまつたのですよ。早く獵場へお出ましになればよいに。」

とせきたて、馬を走らせて野へお出ましになりました。

大長谷の王子のお側にゐた人どもは、

「あの王子は、厭なことをいふ王子ですから、御用心なさい。お身体を堅く守つておゆきなさるやうに——」

と申しあげました。

大長谷の王子は、着物の下に鎧を着、弓矢をとり、刀を腰にさし、馬に乗つてお出ましになりました。

さうして、忽ち追ひつき、馬を雙ばせてお進みになりましたが、矢をとるが早いか、忍齒の王を射落し、遂に、其の身体をすたすたに斬つて、馬の飼葉を入れる桶に投げ込み、土の中へ埋めておしまひなさいました。

此の市邊の忍齒の王の御子たち、意當那の王と袁那の王とは、此のことをおきよになつて、遠くお逃げなさいました。

さうして、山城の荻羽井でお晝食をしていらつしやると、眼に黥をした白髪の老人が来て、その食物を奪つてしまひました。

お二人の王子は、

「そんな食物は惜しくない。が、お前は誰だい。」

とおたづねなさいました。

「私は山城の猪甘ぢや、朝廷の猪を飼つてゐる者ぢや。」

と申しました。

二王子は、玖須婆の河を渡り、針間の國に入り、志自牟といふ人の家に逃げ込んで、馬や牛の飼つてある牧場で役はれておいでなさいました。

三、 虻 と 蜻蛉

雄略天皇

大長谷の若建の命は、長谷の朝倉の宮にましまして天下をお治めなさいました。

天皇には御子が二人ございました。太子を白髪しろがみの命と申しました。

此の御代に、支那の呉くれの人が渡つて來ました。それらの多くの人々は、大和の國の吳原くれはらに居りました。

皇后、若日下部の王は、河内の國の日下にいらつしやいました。天皇は、生駒山の暗峠くらがらたけを越える日下の直越の道を通つて、河内の國へおでましになりました。

その時、山の峠たけに立つて、國の平原を遙々と眺めなさいますと、堅魚木かづきぎといつて、堅魚かづをに似た木を屋根の棟むねに幾つも並べて結びつけた立派な家がありました。

天皇は、珍らしく思召し、

「あの堅魚木をあげて作つた家は誰の家だ。」

とおたづねになりました。

「あれは、河内の國、志幾の大縣主の家で御座います。」

と答へました。

天皇はお怒りになつて、

「自分の家を天皇の宮殿のやうに似せて作るなどは、失禮な奴だ。」

とおつしやつて、直に人を遣はし、焼きはらつてしまはうとなさいました。

大縣主は、びつくりして、頭を何度も下げ、

「賤しい者であれば、賤しい者のやうにしなければなりませんでしたのに、何も辨へず、

ついこんな過ちをいたしました。どうかおゆるし下さい。」

と申しました。さうして、おわびの印として、まつ白な小犬に美しい布片を被せ、かあい

らしい鈴をつけて、腰佩といふ身内の者に、その細をひかせて献りました。

天皇は、そこで、家に火をつけることはお止めになりました。

それから、天皇は、若日下部の王の御許に参り、その小犬をお與へになりました。

「これはね、今日道で手に入れた珍しいものです。あなたへの贈り物ですよ。」

とおつしやいました。

若日下部の王は、おそばの女に命じて、

「天子様は日にそむいてわざわざおいで下さいました。畏れ多いことで御座います。直に

お仕へいたします。」

とお答へなさいました。

そこで、天皇は、一まづ先へ宮にお歸りなさいました。その折、かの山の坂の上におたち

になつて、

日下部の

此方の山と

たゞみ薦

平群の山の

此方と此方の

山の間

立ち榮へてゐる

葉の廣い 熊白檜よ——

山の麓には

いくみ竹が生えてゐる——

山の頂には

たしみ竹が生えてゐる——

なつかしきわが思ひ妻よ——

とお歌ひになつて、その歌を使のものにもたせておかへしになりました。

また、或る時、天皇は遊びがてら美和川の邊にお出かけなさいました。すると、河の邊の石の上に蹲つて、着物を洗つてゐる少女がありました。それは顔容の美しい少女でした。

天皇は、その少女にむかつて、

「お前は誰の子か。」

とおたづねなさいました。

「私は、引田部の赤猪子と申します。」

と答へました。

「さうか、では、お嫁に行かないでゐてくれ。今にお前を喚びよせるから。」

とおつしやつて、宮へお歸りになりました。

赤猪子は毎日天皇の仰せを待つてゐる中に、つい八十年もたつてしまひました。

赤猪子は考へました。

「仰せを待つてゐる間に、長い長い月日がたつてしまつた。顔に皺はよるし、腰はかゞむし、もう恃み甲斐もない。しかし、長い間待つてゐた心持ちを申しあげなくては、心苦しくてたまらない。」

さう思つて、種々の品物を持參して献りました。

然るに、天皇は、前に仰せになつたことをすっかり忘れてしまつて、

「お前は一体何といふお婆さんだ。さうして、何しに來たんだね。」

とおつしやいました。

赤猪子は、

「昔、あの年のあの月に、天皇の仰せを受けましてから、今日まで一日も忘れず、お待ち

申してゐましたが、もう八十年もたつてしまひました。今ではこんな顔も身体も衰へて、侍がひもありません。しかし、私の志だけなりとも申しあげやうと思つて、わざわざ参つたので御座います。」

と申しました。

天皇は大さう驚きなすつて、

「さうだつたね。私はもうすつかり忘れてしまつてゐた。併し、お前が操を守つて、むだに若い時をすごしてしまつたのは、實に氣の毒なことだ。」

とおつしやいました。さうして、お側に置かうとお思ひなさいましたが、もうあまりに婆さんなので、遠慮してお歌をお與へなさいました。

御諸の

嚴白檀の本よ

白檀の本よ

大變な事をしてしまつた

白檀原の娘よ

もう一つの歌は、

引田部の

若い栗の原よ

若い時に

喚びよせるのだつたのに

年とつてしまつたよ

赤猪子は泣き伏しました。着てゐた赤い摺衣の袖は涙にぬれてしまひました。その時、赤猪子のよめる歌。

御諸に

齋き祀る玉垣

齋きあまし

誰におたよりいたしませう

神にお仕へする方よ――

もう一つの歌。

日下の入江の

入江の蓮よ

花蓮よ

年若い人は

うらやましい

天皇はお婆さんの赤猪子に、多くの品々をお與へになつて、おかへしなさいました。

また、天皇、吉野の宮へお出ましになつた時でありました。吉野川の邊に一人の少女がゐました。優しい少女でありました。

天皇は、此の少女を宮へつれてお歸りになりました。

後に、また、吉野へお出ましになつて、前に此の少女にお遇ひなすつた所に、大きな床几をこしらへさせ、その上で琴をお弾きになり、少女に踊らせなさいました。

少女が巧みに踊りましたので、天皇は、

吳床の上におゐて

私の指先で

弾く琴にあはせ

舞をまふ女よ

いつまでも斯うしてゐたいぞ

とお歌ひになりました。

それから、阿岐豆野へ出て獵をなさいますと、蛇が一匹飛んで来て、吳床に腰を下してゐらつしやる天皇の御腕に咋ひつきました。すると、一匹の蜻蛉がとんで来て、ついと其の蛇を咋はへて飛んで行きました。

天皇はすぐにお歌をお口ずさみになりました。

み吉野の

袁牟漏が岳に

猪がゐると

誰だ

私につげたのは
安見し、我が大君が
その猪を待つと

吳床にすはつてゐると
白妙の袖の重なつてゐる
腕の肉の上を

蛇が喰ひついた
その蛇を
蜻蛉が喰つて行つたぞ

そらみつ大和の國を
秋津しまといふ
大和の國の名を負へる

あきつが
その時から、此の野を阿岐豆野と云ひました。

また、ある時、天皇は、葛城の山の上へお登りになりました。すると、大きな猪が飛び出て來ました。

天皇は、鳴鏑の矢をうならせて射なさいました。猪は、ますます怒つて、喉を鳴らしながら踊りかゝつて來ました。

天皇は、驚いて側の榛の木へお登りなさいました。
安見し、
吾が大君が
お射とめになつた

手負ひの猪めが
怒鳴り來るのを畏れて
逃げ登つた

あの荒丘の
榛の木の枝よ！
其の時のお歌であります。

また、ある日、葛城の山へお登りになりました時に、多くの官人たちは、皆まつ赤な紐のついた青い草葉摺の着物を服てゐました。

すると、彼方の山の低いなだれから、山を上へ登つて行く多くの人の群がありました。全く天皇と同じ齒笄で、官人たちの装束も、人たちの顔も少しも變らないのです。遙々とそれを望んで、天皇は、

「大和の國には、私より外に、一人も國王はない筈なのに、今あそこに行くのは誰だ。」とお尋ねなさいました。

すると、天皇のおつしやることと同じことを彼等は申しました。天皇はお怒りになつて、矢を番へなさいました。官人たちも皆矢を番へしました。すると、其の人たちも皆同じやうに矢を番へしました。

天皇は、

「ではお前たちも名告るがよい。皆が名告りあつてそれから矢を弾たう。」とおつしやいました。

「では、お尋ねをうけましたから、申し上げませう。私は、悪い事でもたつた一言、善い

事でもたつた一言、言ひはなつ神、葛城の一言主の大神であります。」

と答へました。

天皇は、

「成程！」

とおつしやつて、

「それは恐れ多い事だ。大神に人間と同じ御家來があらうとは少しも知らなかつた。」

と仰せになりました。

さうして、刀も弓も矢も悉く前にさゝげ、官人の青い着物もすつかりぬがせてお献りになりました。

此の一言主の大神は、ぼんぼんと手を打つておうけになりました。

天皇がお歸りになる時には、一言主の大神は、嶺を下つて、長谷の山の麓までお送りなさいました。

また、天皇は、丸遷の佐都紀の臣の女、遠杼姫をよび出さうと思つて、春日へお出ましに

なりました。姫はそれを見て、岡邊に逃げかくれました。その時に、天皇は、

金鉏の

五百本もあるならば

少女のかくれた岡を

掘りかへしてやらうものを――

とおうたひになりました。それから、その岡を金鉏の岡とよぶやうになりました。

また、天皇は、百本も枝のある長谷の槻の木の下で、お酒宴をおひらきになりました。

その時、伊勢の國の三重の采女といふ娘が、お盞を兩手でさしあげて献りました。そのお盞の上はその枝をはつた槻の木の葉が落ちて浮んでゐました。三重の采女は、それに氣づかないで、お酒をさしあげました。天皇は、その浮いてゐる葉をもらひになつて、いきなりその采女をうちふせ、刀をぬきはなつて、細い頸にさしあて、斬つてしまはうとなさいました。すると、采女は、

「どうぞ、命だけはお助け下さい。申しあげねばならぬことが御座います。」

といつて歌をうたひました。

纏向の 日代の宮は

朝日の 日の照る宮

夕日の 日のかげる宮

竹の根の はびこる宮

木の根の はひまはる宮

八百土よし 築きあげた宮

檜を割いた 檜の御門

新嘗の御殿の上に 生えたつてゐる

おびたゞしい槻の枝は

上の枝は 天を覆つてゐる

中の枝は 東國を覆つてゐる

下の枝は 西國を覆つてゐる

上の枝は 枝の末つ葉は

中の枝に 落ちかゝつて觸れてゐる
 中の枝の 枝の未つ葉は
 下の枝に 落ちかゝつて觸れてゐる
 下の枝の 枝の未つ葉は
 鮮絹の 三重の采女が
 さゝげてゐる 玉の盃に
 脂のごとく浮いてゐる酒に
 こをろ！こをろ！と落ち漂ふてゐます
 恐れ多う御座います
 空高く輝やきなさいます
 日の皇子様
 天皇はすぐにその罪をおゆるしになりました。
 此の時に、皇后もおうたひになりました。
 大和の

小高い丘の
 新嘗の御殿に
 生え立つてゐる
 葉の廣い椿の
 その葉のやうに廣く
 その花のやうにかゞやきます
 高空に輝やいてゐらつしやる
 日の皇子に
 お酒をさしあげなさい
 すると、天皇はまたお歌ひなさいました。
 百しきの 大宮人は
 鶉鳥のやうに
 領巾を胸にかけて
 鶉鳥のやうに

裳すそをひいて

庭雀のやうに

蹲つてゐて

今日もまた酒宴するらしい

空高く光る

日の宮人よ

天皇は、此のお酒宴に、三重の采女をほめて、多くの品々をお與へなさいました。

天皇は、御年百二十四歳でおなくなりなさいました。御陵は、河内の多治比の高嶋にあり
ます。

清寧天皇

白髪の大倭根子の命は、伊波禮の甕栗の宮にましまして、天下をお治めなさいました。

天皇には、皇后も皇子も御座いませんでした。従つて、天皇がお崩れになりましたから、天

下をお治めになるべきお方はありませんでした。よつて、市邊の忍齒別の王の御妹、忍海の
郎女が、葛城の忍海の高木の角刺の宮で、天下をお治めなさいました。此のお方はまた飯
豊の王とも申しました。

こゝに、山部の連小楯は、播磨の國へ勅を承けて参りました。さうして、其の國の人、
志自牟の新しい家の祝宴に招かれて行きました。

酒宴が進んでゆきますと、大聲をあげて歌をうたひながら、順番に舞をしました。

そのうちに、室の暗い片すみの竈の傍に蹲つてゐた火焚きの少年二人も、舞はねばなりま
せんでした。

一人の少年は、

「兄様から舞つて下さい。」

といひました。すると、兄は、

「いや、お前から舞つておくれ。」

といひました。

兄弟が何度も斯うして譲り合つてゐるのを見て、集つてゐた人たちはくすくすと笑ひ出しました。
 そこで、しかたなく、兄の少年が先に舞ひ、次に弟の少年が舞ひました。弟の少年は、その時に歌ひました。

雄々しい武士 我が若者が

腰に佩びた太刀の柄に

丹き飾りを描きつけ

その緒には赤い布片をつるし

赤い旗を押し立て、

見つけられ、ば隠れられる山かげの

竹を掻きわけ苅りとり

押し靡かせることは

八弦の小琴を調べと、のへるやうに

天下をお治めなさいました



律光謹写

皇 子 の 舞

伊邪本和氣の天皇の皇子

市邊の押齒の王の末の子供

これはあたりのものに事よせて、自分の身の上を述べたのであります。

小楯の連は、びつくりして床から轉り落ちました。それから、室の中の人たちを皆追ひ出して、二人の皇子を上座に座らせ、うれし泣きに泣きました。それから、多くの民を集めて来て、假の御殿を作り、一先づ其處におとどめして、急ぎの使を都へ走らせました。

その兄は意當那の命、弟は袁那の命でした。

御姨の飯豊の王は、それをおきくになると、大さうお歡びなすつて、すぐさま宮へおよびよせになりました。

平群の臣の祖に、志毘の臣といふ者がありました。

ある晩、人々が群がり集まつて踊りをしました。それを「歌垣」といひました。その折、志毘の臣は、袁那の命がお妃にしようとしていらつしやつた菟田の首の女、大魚といふ美しい少女の手をとりました。



丁度、そこに袁祁の命がいらつしやいましたので、志毘の臣は、

大宮の

彼方の櫓が

朽ち傾いたぞ！

と歌つて、其の續きを歌へと申しました。

袁祁の命は

大工の

その腕がつたないから

朽ち傾いたのだ

とお歌ひになりました。

志毘の臣は、また、

大君は

あまりに心がゆるやかだから

臣の子の私は

八重の柴の垣から

入り込ますにゐるのだ

とうたひました。

袁祁の命は

潮の瀬に

折れかへる大波を見れば

遊び遊びやつてくる

鮪の鱭のはしくれに

大魚がかくれてゐるのが見えるぞ

とおうたひになりました。

すると、志毘の臣は、かつと忿つて、

大君の 御子の柴の垣は

八所結んだ

結びめぐらした垣かも知れぬが

たち切れる柴垣だ！
焚きくべられる柴垣だ

とうたひました。

袁祁の命は、また、

大魚よ

鮪を衝く海夫よ

大魚があれば

さぞ戀しからう

鮪をつく！鮪！

斯う歌ひながら夜をあかして、おかへりになりました。

次の朝、意當祁の命と袁祁の命とは、御相談なさいまして、

「凡ての人たちは、朝の中だけ朝廷へ来るやうだけれども、晝頃にはみな志毘の家へ行つてしまふ。丁度、今頃は、志毘も寝てゐるだらうから、家にはそんなに人の居る筈はあまい。今、直ちにやればよいかも知れぬ。」

といつて、すぐ兵士を集め、志毘の家を圍んで、殺してしまはれました。

二柱の御子は、互に天下をお譲りあひになりましたが、意當祁の命は、かたく、御弟、袁祁の命にお譲りなさいまして、

「播磨の志自牟の家におた頃に、あなたが名前を顯はさなかつたら、斯うして天下を治める身の上とはなれなかつたに違ひない。全くあなたの功といふものだ。私は兄ではあるけれども、あなたから天下をお治めになるべきです。」

とおつしやいました。袁祁の命は、辞退するわけにもゆかず、やつとのことでおひきうけになりました。

顯宗天皇

袁祁の石巢別の命は、近飛鳥の宮におはしまして、八年の間天下をお治めなさいました。天皇には御子がございませぬ。

天皇は、御父、市邊の王の御屍骸をお尋ねになりました。すると、近江の國の賤しい一人のお婆さんが、

「王の御なきがらをお埋めした所は、私がよく存じてゐます。また、王であることは御齒でよくわかります。」

と申し出でました。

天皇は、民に命じて土を堀り御屍骸をお求めになりました。さうして、蚊屋野の東山に御陵を作つてお葬ひなさいました。それから、韓俗の子供等に御陵を守らせなさいました。

後、宮へお歸りになつて、彼の老婆を喚びよせ、土地も失れずちやんと見知つてゐたことをお譽めになり、置目の老嫗といふお名前をたまはりました。さうして、宮へお召しになつて、あつくお慈みになりました。また老嫗の家を宮の近くに新しく建て、毎日必ずおよびよせになりました。御殿の戸に大きな鈴をかけておいて、老嫗をお召しになる時には、必ずその大鈴をおならしなさいました。天皇は、

浅茅が原

小谷を過ぎて

遠いところから来るやうに

よちよちと歩みつゝ

置目が来るらしいぞ！

大鈴が鳴つて居る

とお歌ひになりました。

置目の老嫗は、

「私は大分年をとりましたから、どうか本國へかへして下さい。」

天皇は、おきくとゞけになつて、お暇をたまはりましたが、名残惜しく思召し、

置目よ

近江の置目よ

明日からは

深山にかくれて

見えなくなつてしまふだらう

とおうたひなさいました。

天皇は、少年の頃、難に逢つてお逃げなされた時に、お晝食を奪ひとつた猪甘の老人をお求めになりました。漸くそれを探し出し、飛鳥河の河原で斬り殺し、その一族の悪者どもを捕へ、皆その膝の筋をお断ちなさいました。それで、後の世まで、その子供たちが倭の國へ上らうとすると、必ず自然に足の力がふらふらとぬけてしまふのでした。

天皇は、御父の王を殺した大長谷の天皇を深くお怨みになり、その靈に對して報をしようと思つていらつしやいました。

天皇は、大長谷天皇の御陵を碎いてしまはふと思召し、人をお遣はしになりました。

その時に、お兄様の意當那の命は、

「御陵を碎くについては、他の人を遣はしてはなりません。私自身が行つて、天皇の思召し通りに碎いてまゐりませう。」とおつしやいました。

天皇は、

「では、お考へ通りにして下さい。」

と仰せられました。

意當那の命は、自らお下りになつて、御陵の傍を少しばかり掘り、そのまゝすぐお還りになりました。

さうして、

「もう掘り壞して來ました。」

と申されました。

天皇はあまり早くお歸りになつたのをあやしんで、

「どんなに壞しておいでになりましたか。」

とおたづねなさいました。すると、命は、

「お墓の土を少しばかり掘りました。」

とお答へになりました。

天皇は、

「私はお父上の仇を報いる爲めにやるのです。御陵をすつかり壊してしまはなくてはいけません。なせそんな手ぬるいことをなさるのです。」と仰せになりました。

すると、意當那の命は、

「父上の怨をあの靈に報いるといふのはもつともです。然し、かの大長谷の天皇は、父上の爲には怨みに思はれるが、よく考へて見ると、私たちの従父上でもあるし、また、天下をお治めになつた天皇でもあるのです。今、たゞ父上の仇だといふので、天下をお治めになつた方、御陵を碎いてしまふといふのは、後の世に對しても實に恥づべきことです。といつて、父上の仇は報いなければならぬのです。ですから、あの陵の土を少し掘りかへしました。斯うして、とにかく恥をお見せしたのですから、後世に對しても理由がたちませう。」

とおつしやいました。

天皇は、

「成程、全く其の通りだ。あなたの思召し通りで大變によいと思ふ。」

と申されました。

天皇は御年三十八歳でおなくなりなさいました。御陵は片岡の石塚の岡の上にあります。天皇がおなくなりなされたので、意當那の命が御位におつきなさいました。

仁賢天皇

意當那の命は、石の上の廣高の宮におはしまして、天下をお治めなさいました。御子は七人いらつしやいました。皇太子は、小長谷の若雀の命と申しました。

武烈天皇

小長谷の若雀の命は、長谷の列木の宮にましまして、八年の間、天下をお治めなさいました。

天皇は御子が一人もありませんでしたから、應神天皇の五世の孫、袁本杼の命を近江の國からおよびして、天皇のお位にお上せることになりました。

繼體天皇

袁本杼の命は、伊波禮の玉穗の宮におはしまして、天下をお治めなさいました。
 御子はみなで十九人ございました。皇太子は、天國押波流岐廣庭の命と申しました。後に
 廣國押建金日の命も建小廣國押楯の命も天下をお治めなさいました。
 此の御代に、筑紫の君・石井といふ者が、天皇の命にそむいて無禮なことをしました。天
 皇は、物部の荒甲と大伴の金村に命じて、これを平らげなさいました。
 天皇は、御年四十三歳でおなくなりになりました。御陵は三島の藍にあります。

安閑天皇

廣國押建金日の命は、勾の金箸の宮にしまして、天下をお治めなさいました。
 天皇には御子がありませんでした。御陵は河内の古市の高屋の村にあります。

宣化天皇

建小廣國押楯の命は、檜桐の應入野の宮にしまして、天下をお治めになりました。
 御子は五人でございました。

欽明天皇

天國押波流岐廣庭の天皇は、師木島の大宮にしまして天下をお治めなさいました。
 御子は二十五人ございました。皇太子は沼名倉太玉敷の命と申しました。後には、橘之豊
 日の命も、豊御氣炊屋比賣の命も、長谷部の若雀の命も、ともに天下をお治めなさいました。

敏達天皇

沼名倉太玉敷の命は他田の宮にしまして、十四年の間、天下をお治めなさいました。
 御子は十七人ございました。御陵は川内の科長にあります。

用明天皇

橘の豊日の命は、池邊の宮にしまして、三年の間、天下をお治めなさいました。

御陵は、石寸の池上にありましたが、後に科長の中陵にうつされました。

崇峻天皇

長谷部の若雀の命は、倉椅の柴垣の宮にましまして、四年の間、天下をお治めなさいました。御陵は、倉椅の岡の上にあります。

推古天皇

豊御食炊屋比賣の命は、小治田の宮にましまして、三十七年の間、天下をお治めなさいました。御陵は、大野の岡にありましたが、後に、科長の大陵にうつされました。

——(新) 古事記讀本 終 ——

昭和四年六月二十日印刷
昭和四年六月二十五日發行

新譯古事記讀本
定價金壹圓八拾錢

版權所有



著者 三浦藤作

發行者 株式會社 文教書院

右代表者 近藤彌壽太

印刷者 齋藤梅吉

印刷所 三立舎印刷所

發行所 株式會社 文教書院

關西大搦 株式會社 大阪寶文館

東京市牛込區赤城元町

振替東京四四三三番

大阪市西區阿波堀通四丁目

振替口座大阪四三番

濱田廣介先生著・初山滋畫伯

裝幀 挿繪 全國圖書館協會 東京高師若溪會 特薦

最新刊



第四集

豆が欲しい子 外三十三篇

- 定價 一圓八十錢
- 送料内地十二錢
- 菊版函入一九〇頁

第四集出づ!!

一集出づる毎に全兒童讀物界に一大活氣を興へて來た我が濱田廣介先生のひろすけ童話讀本は、いよく
 茲に第四集が發賣されました。先生の童話が藝術的に見て満點である事は、島崎藤村先生はじめ、
 一流藝術家が擧つて推賞するに明かであり、教育的に見て甲ノ上である事は圖書館協會若溪會等教育
 界の諸權威が揃つて推薦するに證して餘りありません。
 新刊第四集は「豆のほしい子鳩」外三十三篇何れも先生の泉のやうに湧き出づる愛の精神と滋雨のやう
 に豊かな天分の力とによつて創作された珠玉のみであります。その文章のなだらかさ、美しさ、
 どこを讀んでもそのまま詩であります。一字一行意味なくしてをかれた文字はありません。
 加ふるに例に依つて、さながら童話の國を思はせる初山滋畫伯の挿繪は、本書の藝術的價値を彌が上
 にも昂めてやみませぬ。切に一讀を勧めます。

大好評

ひろすけ童話讀本第一集	花びらの旅	定價一圓八十錢	十一版發賣
ひろすけ童話讀本第二集	お月様と鯉の子	定價一圓八十錢	九版發賣
ひろすけ童話讀本第三集	金の靴を	定價一圓八十錢	七版發賣

第五集近刊

585
79

